
サンタ魔法の小さな奇跡

音秋花子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタ魔法の小さな奇跡

【Nコード】

N3228B

【作者名】

音秋花子

【あらすじ】

クリスマスが嫌いな女2人が、気まぐれに靴下に願い事を書いて、ベランダに吊るしたら・・・サンタが願いを叶えるためにやって来た・・・

（前書き）

大人のちょっとした冗談みたいなラブロマンス。クリスマスの奇跡を信じてみませんか。

クリスマスが嫌いな女が2人、瑠花の部屋の4畳半の炬燵の中で丸まっていた。OL稼業の2人は、イブの夜にはきまって自らに不必要なほどの残業を課するのが常だった。

それが、残念ながら、今年の24日は日曜日で、25日は月曜日と来た。これでは、恋の話に花咲く後輩達の前で、仕事の出来るお局様も気取れない。既婚者に寛大な社風の中で、子連れの小母さんがゾロリと働いている中では、上には上がいるというものだ。

29歳というのは、女にとって、実に微妙な歳だった。

声高に20代よ。と、叫んでも、三十路に到達するまでに、苗字が変わるのが、月齢を重ねる程に難しくなっていく。

乾涸びた29歳ならば、諦めもつくだろうが、この2人は、まだ涸れ尽きていない自負があった。

いい男さえいればね・・・

どこに転がっているというのか。いい男には、いい女がしがみついているように、選ばれない女は、選ばない男にさえ見捨てられていた。自然の摂理。

現実を強かに生きてしまう賢明な女2人、瑠花と、初音は、瑠花の部屋の炬燵の中で黙って丸まっていた。

「やっぱり昆布茶がいいわねえ。」

「梅茶よ。やっぱり。」

「誰よ。こんな日に、ワインなんて男と飲んでる野暮は。」

「初音・・・わかったから。その言葉は禁句よ。禁句。守れないんなら、この部屋から追い出すよ。」

「わかったってば。あたしは自分の部屋にいるわけにはいかないんだから。お願いだから、ここに居させてよ。」

「馬鹿ね。澄夫があんたの部屋の留守を嫉妬するくらいなら、あんたは最初から、この部屋にはいないし、今頃、澄夫のベッドの中よ。」

いい？現実を見なさい。澄夫は、22歳の瑞穂にゾッコンで、今頃は張り込んだホテルのスイートでラブロマンス中よ。」

瑠花が毒のような言葉を低い声で淡々と吐くので、初音は言葉の弾丸撃たれて蜂の巣になった西部劇ガンマンの前の酒場のドアのように、ボロボロになって、瑠花の炬燵のテーブルに突っ伏した。

「別に、澄夫なんて、どうでもいいのよ。あたしは。」

初音は、突っ伏したまま鼻を嚙った。

「あー、今日こそ、会社に行きたい日ってないわよね。」

ぐずぐずと喋り続ける初音を、息を殺したように押し黙ったままの瑠花が、ジロリと睨む。

「ねえ・・・瑠花、サンタをお願いしてみようか？」

「何寝惚けたこと言ってるのよ。」

「んーん。サンタを信じてた頃は、サンタの魔法ってあったじゃない？今日だけはさあ、サンタを信じてみたっていい日のような気がするんだけど。」

初音は、ガサゴソと自分の履いている靴下を1足だけ引き抜いた。瑠花の電話の傍のメモをペロリと捲って、

あたしに相応しい男。下川初音。

と、サインペンでくつきりと書き、セロハンテープで靴下に丁寧に貼り付けた後、ベランダに出て吊り下げた。

「ったく・・・馬鹿馬鹿しいわね。」

瑠花は、梅茶をぐつと飲み干した後で、ブツブツと現実を見なさいとか、世の中にそんな甘い話があるなら誰も苦労しないと、言いながらも、初音を真似て、靴下の片方を、ベランダに吊り下げた。

あたしに相応しい男。滝本瑠花。

寒空のもとで、2つの靴下が、虚しくベランダで揺れていた。

「あはははは。」

2人は、顔を見合わせて笑った。

溜花の向いのマンションは、運送会社の社員寮になっていた。

支給されたサンタ服を引き摺りながら、向井新一は、寮の前を歩いていた。クリスマスプレゼントなのか、今日は個人宅への指定日配送が夜間に集中していて、休む暇のないほど、あちこちを駆け回ったので、草臥れ果てていた。

新一は、クリスマスに浮かれる人間の気持ちが全くといって理解できなかった。キリスト教徒ならば、聖夜を崇める理由もあるだろう。日頃無宗教なのに、こういう日だけ馬鹿のように騒ぐ。子供がクリスマスの日に託けて、玩具をねだるという即物的な行為の方が、余程理に適っているというものだ。何故、男と女までが、わざわざ聖夜を特別視して共に過ごすのだろう。その日でなくなっただけいいだろうに。こうして選ばれなかった男は、いったいどうやって過ごせばいいというのか。

新一にも数年前までは、この日に自分のために着飾ってくれた女がいた。20代の頃は、結婚という2文字が束縛を意味するものとして禁忌に感じていたというのに。あの時逃した女が、溜まらず惜しく思えるという馬鹿ばかりさも、こんな夜だからこそだ。

新一の俯いた鼻先に、擦れた靴下が1足。ホロリと空から落ちて来た。寒空の中、仄かに温かく、誰かがさっきまで履いていたというような靴下に、

”あたしに相応しい男。下川初音。”

すっかりとした文字がメモに書かれて、テープで止めてあった。ブロックメモは、新一が配送で出入りしている、水産会社の社名が印刷されていた。

靴下に願い事ってか・・・この間抜けな女が、こんな馬鹿な冗談をやってるっていうのか。

多分、落ちて来た経緯からすると、この近くに住んでいるのだろうが・・・新一は、あたりをキョロキョロと見回した。

同じ会社の1つ先輩の後藤恭介が、コンビニ袋を提げてやって来るのが見えた。

「何やってんだ？向井。」

「ああ、後藤さん、今帰りですか。」

「うん。今日は配達が立て込んでてさ、水も飲む暇がなかったからさ、コイツをね。」

恭介が500mlビール缶とピスタチオの入ったコンビ二袋を新一の前でゆるゆると振った。

「あ？何持つてるんだ？向井。」

「ああ、これ？どつかの馬鹿女がサントに願い事してるみたいなんで。」

新一が、初音の靴下を恭介に見せた。

「はははは。」

恭介も笑った。そのまま、周囲を見上げる。

「このアパートは1人暮らし用のワンルームだったはずだよ。」

「俺の鼻先に振って来たんです。この辺から、ふわっと落ちて来たと思うんですよ。」

エレベーターを使わない習慣のせいで、新一と恭介は、社員寮の非常階段を登る。

「おい、向井、あそこ。」

「ったく、わかりやすいですね。1部屋しか、明りが灯ってないんだから。」

「こんな夜だしな・・・。」

新一と、恭介は、瑠花の部屋のベランダのある階で、ピタと止まった。

「あ、もう1つぶら下がってますよ。後藤さん。」

「本当だ。」

新一は、初音の靴下にテープで貼られたメモをもう一度眺めた。

「俺、サントの衣装、持って帰って来ちゃったんですよ。」

「俺もさ。」

新一と、恭介は、顔を見合わせた。

「あたしに相応しい男って、なあ。」

「俺、小さい頃、長靴の中にお菓子をいっぱい詰めたもの貰って、
凄く嬉しかったんですね。」

「行ってみないか？」

「これに、お菓子でも詰めてやりませんか？」

「ああ、サンタの衣装着て、この靴下を持って行けば、ジョークつて通じるだろう。」

2人は、馬鹿らしいと思いながら、こんな日だから、有りかも知れないという、ちょっとだけ子供の頃のようなやんちゃな気分で、コンビ二にありったけの小さいお菓子を買って、袋に2杯詰めた。

部屋に戻って、サンタの配送用衣装に着替えて、2人は、溜花のアパートへ向かった。

初音は、メモ用紙に、サンタやクリスマスツリーのヘタクソな絵を描きながら、テーブルの上に撒き散らした。溜花は、手編みのマフラーを既に2m超えているのに編み続けていた。編んでは解き、編んでは解いて、冬の夜を過ごしているのが、いつの間にか常になっていた。

「ねえ、ほら、金曜日に会社に来た化粧品セールのお姉さんが、
いっぱい試供品くれてたよね。」

「ああ、あるよ。試供品ばっか、どっかに旅行にでも行こうかって
思ってたんだけど、使う宛もないんだよね。」

「久し振りに、あたしが化粧したげよっか？」

「いいね。着飾ってね。」

薔薇の香りの入浴剤をたっぷり入れた風呂に浸かり、マッサージ用クリームを使って、エステ気分。手足のケアもして、試供品の高級シャンプーで丁寧に髪を洗ってトリートメント・・・風呂を上がって髪を綺麗にカールして、腕を上げている化粧を互いの顔に施す。仕舞いこんでいた着る宛のなくなったドレスを引っ張り出して着た。今すぐに、街に出歩けそうなスタイルに決まった。

2人は声を立てて笑った。

「こんなイブも悪くないじゃない？」

「あたたचितって、まだまだいけるよね。綺麗よ瑠花。」

「初音あんたもね。」

ピンポン。ピンポン。

瑠花の部屋のドアの外に、誰かがやって来た。

「あーん・・・澄夫かもお。」

「馬鹿ね。初音。サンタよ。サンタ。」

「へっ？」

「サンタが2人、立ってるよ。」

瑠花が、ドアの魚眼レンズを覗いて言う。

「こんな時間に宅配便？」

「うっん・・・初音、あんたの靴下持ってるわ。」

初音と瑠花は、顔を見合わせた。

瑠花が、ドアをおずおずと開けた。

「メリークリスマス。下川初音さまに、お届けものです。」

「もう一人のベランダの靴下の持ち主さまに、お届けものです。」

「はあ？」

「あなたに相応しい男は、いかがですか？」

「下川初音はあたしですけど・・・。」

初音がおずおずと顔を出すと、新一が、初音の靴下を差し出した。

初音は、まっすぐに新一の顔を見上げ、

「あらっ。沢渡運輸のお兄さんじゃない。」

「あああ・・・やっぱり、魚海水産の事務員さん。この、メモの印刷、そうじゃないかなあって思ってたんです。」

「きやははっ。恥ずかしいわねえ。冗句のつもりだったんだけど。」

「名前、初音さんって言うんですね。」

「やだなあ・・・そんな目で見ないでよ。恥ずかしいじゃない・・・ごめんね。若くて綺麗な子じゃなくなっで。」

「いや、充分、若くて綺麗ですよ。」

新一は、キラキラした目を初音に向けた。

「あの、俺、32歳、向井新一って言います。彼女募集中です。」

初音は、サンタの衣装のせいなのか、頬を少し赤らめて見える新一をぽおつとした目で見上げた。

「知り合いのようでしたね。・・・俺は、後藤恭介って言います。

向井と同じ沢渡運輸です。33歳。独身。彼女募集中です。あなたも、靴下を？」

「あ・・・あたしは、滝本瑠花。靴下は、ベランダに・・・。」

恭介は、コンビ二袋を掲げて振った。

「サンタの格好してお菓子持ってきました。よかったら、一緒に、食べませんか？って、言いたいんですけど・・・飲みにも行きませんか？」

瑠花は、笑って言う。

「狭いですけど、上がりませんか？ここ、あたしの部屋なんです。」

「いいですか？・・・邪魔します。」

恭介は、微笑みながら、まっすぐに瑠花を見下ろした。

(後書き)

読んで下さってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3228b/>

サンタ魔法の小さな奇跡

2010年10月8日15時57分発行